

氏名(本籍地)	小川 晶(東京都)		
学位の種類	博士(社会福祉学)		
報告・学位記番号	甲第367号(甲福第48号)		
学位記授与の日付	平成26年3月25日		
学位記授与の要件	本学学位規則第3条第1項該当		
学位論文題目	保育所における子育て課題を持つ母親への支援の視点と方法 ー保育士による母親への支援プロセス分析からー		
論文審査委員	主査 教授		森田 明 美
	副査 教授	医学博士	杉田 記代子
	副査 教授		小林 良 二
	副査 龍谷大学教授		山 辺 朗 子

【論文審査・審査結果】

日本の子育ては、親が家にいれば子どもは育つと考えられ、保育所は長い間、親が不在の時の代替機能を果たすことをその役割として期待されてきた。しかし、1990年代に少子化が顕著になるころから、親がいても子育てを支援することが必要とされる家庭があることへの認識が高まり、その支援をすることが、地域で子育てをする家庭の子どもを預かる保育所に求められるようになった。その結果、保育所の支援対象は、保育所に入所する親子のみならず、地域で暮らす親子への広がりをもつようになり、またその支援内容は、子どものしつけや子育ての方法を実際に見せたり、一緒にしたりすることや、毎日の送迎時などに親との接触の機会を設け、親が子育てをする主体として力をつけるために、様々な支援が行われるようになってきている。とりわけ、虐待をはじめ適切な子育てができないために保育所への入所をさせている事例が急増するなかで、保育士には親を支援することが求められるようになってきている。

現代の保育所は、地域で暮らす子育て家庭にとって身近かなところで子育ての支援を受けられる施設であるが、その施設に求められる役割は、仕事と子育ての両立のための多様な保育サービスだけでなく、虐待などの、子どもの育ちや保護者や家庭の持つ課題を解決するための児童福祉施設としての対応が求められるようになってきているのである。

このように、保育所への期待が変化していく中で、保育士がどのように母親への支援を展開するのかということは、重要でかつ緊急な課題になっている。これに対応して保育士養成も子ども支援を中心としたカリキュラムから変化し、「家庭支援論」や「保育相談支援」など保護者や家庭の課題を解決するための科目を作ってきたが、その理論化のための研究

は十分とはいえない状況にある。そうした現代的な課題に対して、保育所における保育士による支援方法を実践的に明らかにすることを通して理論化しようとしたのが小川晶氏の論文『保育所における子育て課題を持つ母親への支援の視点と方法—保育士による母親への支援プロセス分析から—』である。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章 研究の目的と方法

第1章 母親支援の現状と課題

第2章 保育場面での母親支援の現状と課題

第3章 保育士による有効な母親支援に関する調査

第4章 分析結果と考察

第5章 結論 保育所における子育て課題を持つ母親への支援の視点と方法

序章では、研究の目的と方法を論じている。本研究の目的は、保育所に在籍する子どもの母親に対する支援において、支援に必要な視点と有効な方法を明らかにすることであるし、研究の対象は、保育所に在籍する子どもの保護者のうちの子育てに課題を持つ母親と、その母親を支援する保育士であるとしている。

また、本研究においては、子育て課題を持つ母親という対象を以下のように規定して研究の枠組みを設定しているが、この枠組みはこれまで行われてきた保育所の保護者支援の枠組みを超えるものであり、子ども自身の要因だけでなく、主に母親自身の要因が影響して子育てが難しくなっているケースがとりあげられている。すなわち、登降園時になされる保育士との短い会話や連絡帳でのやり取りなどでは課題が解決せず、長時間、長期間におよぶ個別対応や、他機関との連携を必要とするケースを子育て課題を持つ母親と規定している。このようなケースにおいては、母親自身の要因は子育てをする前から「その人自身」が抱えていたものであり、子どもの「母」になったことでその要因が顕在化したり、深刻化したりしていることも多い。それゆえ、子どもの「母」としての一面的な視点で母親を支援しても、子育てが難しくなっている状態を改善することは難しい。子育てしている「母」という一面的な役割だけで母親を捉えるのではなく、その他の役割も含めて母親の全体を対象として理解することが重要であるとする立場で研究を進めている。

研究の方法としては、Z 保育所の保育士と子育て課題を持つ母親を対象にインタビュー調査を実施し、インタビューから得たデータを、3つの段階で分析している。これらの分析結果と先行研究とを併せて、子育て課題を持つ母親への支援の視点と方法について総合的な考察をしている。

第1章では、母親への支援の現状と課題を論じている。先行研究などから、女性は母性によって子育てにふさわしい養育態度をとることができるのみならず社会的な傾向が強く、これが子育てを母親と子どもの関係に限定した問題として取り扱うことの根底的な要因となっており、そのことが母親の育児不安や育児ストレスの背景的な要因となっていると指摘する。子どもを育てることに肯定的なイメージが描けるよう子育て中の母親を支援する手立ては講じられているものの、どれも母親を十分に支えきれていないのが現状であると述べている。

第2章は保育場面での母親への支援の現状と課題について論じている。小川氏は保育所における母親への支援の特徴として、保育所の保育士は、毎日親と接し子どもと長時間かかわることで子どもの小さな変化を感じ取り、家族の異変や問題の悪化に気づくことが可能であるという特徴をもつことから、「保護者支援」「保育指導」「保育指導技術」として体系化の試みがされているが、これらは現場の実情と異なっていると指摘する。このため、保育所にあるジェンダー・バイアスによる母親役割への意識の改善と併せて、母親への支援における役割を再認識して必要な視点を明確にし、支援の方法を構築する必要があるとする。

第3章では、保育士による有効な母親支援について調査結果の分析を通して論じている。調査は、子育て課題を持つ母親10名と安定している母親1名（サンプルデータとして扱った）、母親たちの担任や担当をした保育士6名と所長、主任をインタビューイとして、半構造化インタビューを実施したものである。分析は、母親への支援における母親の捉え方（分析A）、保育士の母親への支援と母親の変容のプロセスTEM（複線径路・等至性モデル）による分析（分析B）、分析Aと分析Bを併せた母親への支援プロセスの分析（分析C）の3段階でおこなっている。

第4章は分析結果と考察である。保育所で保育士が母親を支援する際、「母としての母親」「妻としての母親」「働く女性としての母親」に加えて、母親自身の親子関係である「子としての母親」という母親の4つの役割に対して、担任保育士と所長保育士や主任保育士が分担しながら関係構築にかかわっていることを明らかにしている。

TEM図の分析により、母親の養育態度の改善には、「子としての母親」が肯定的な感情で満たされることが必要であった。「子としての母親」が肯定的な感情を抱けるようになると、子どもや子育てを受け入れることが可能となり、また、母親自身が自分らしさを見出して、自分らしく子育てを取り込んでいくことができる。母親の養育態度の改善は、養育態度を改善させるための情報提供や指導などで実現したのではなく、母親が自分らしく子育てを取り込むことの結果としてもたらされたのであったということを明らかにしている。これは、これまでの不適切な養育態度を教育的な指導によって変更させるという指導方法よりも、母親自身が自己変化した結果として子育てする主体へと変貌することが重

要であることを示していると考えられる。

第5章では、結論として保育所における子育て課題を持つ母親への支援の視点と方法が展開されている。保育所における子育て課題を持つ母親への支援の視点として、保育士には母親を捉える際に「子としての母親」への視点が欠かせない。「子としての母親」が肯定的であるために保育士は寄り添いをするが、その際保育士は、母親が子育てで抱えている否定的な感情に共感して、母親から受け入れられることの重要性を認識する必要がある。母親との共感的な関係は、母親からの共感によって構築され、子どもを保育し日常的に母親とかかわることができる場であるからこそ、より深い関係が築ける。保育士からの日常的で肯定的なかかわりにより、母親は保育士に共感し、価値観の軌道を合わせるかのようにして保育士のかかわりを受け入れ、行動を選択していくということが明らかにされた。

また、保育所における子育て課題を持つ母親への支援の方法としては、支援に有効な関係を構築するためには、一面的なかかわりではなく、母親の役割ごとへの寄り添いが必要であり、「母としての母親」とかかわっていても、子育て課題の要因が「子としての母親」にあるのなら意図的にそこにかかわり、母親が心地よいと感じるアプローチが求められる。そのためには、母親の役割ごとに異なる心地よい関係を、立場の異なる保育士が連携し、かつ重なり合うようにして構築することが有効である。「母としての母親」には担任保育士が、一方「子としての母親」には所長保育士や主任保育士がかかわるだけでなく、「妻としての母親」「働く女性としての母親」には、担任保育士が「親和的」（同士のようなかかわり方）であるのに対し、所長保育士や主任保育士は「包容的」（母親の語りにある「お母さんのような」かかわり方）であることで、母親は全体として心地よさを感じることができるようになることが示された。つまり、保育所にいる立場の違う保育士が、チームで支援にかかわることができることで、その支援が有効になっていくことが明らかになった。

子育ての課題は母親と子どもとの関係に限定した問題ではない。また「母としての母親」だけの問題でもない。本研究が対象とした母親のように、保育士に支えられて自分自身を変えながら子育てをし、共感的な子育てをすることで自分自身が変わっていくこと、そして自分らしさを見つけ、自分らしく子育てをしていくことで「社会との関係」を作り、孤立しないで暮らしていくことが可能となるような支援が、保育所固有の母親への支援であり、保育所の役割であると結論づけられている。

なお、本研究の限界と課題として、本調査インタビューの母親は、Z 保育所や保育士に対して信頼を抱いている者に限定されていることが述べられている。母親への支援は個別性が高く、ここで分析にとりあげた事例とは異なる事例があることは当然であり、その意味ではより一般的な類型化には限界があるとされている。

【評価】

以上、紹介してきた本論文に対する審査委員会の評価は次のとおりである。

第1に、本論文の価値としては、保育所における実践例を、長期間にわたり保護者と支援者の双方からヒアリングすることができ、またその結果を実践者と保護者の双方にフィードバックして検証しながら、理論化する場を獲得することができたことが指摘できる。このことは、小川氏が、実践者としてもすぐれた取り組みと知見を有していることから、その存在が好意的に受け入れられ、そのことによって、この研究が成立したことを示している。おそらく、このように3年間にわたる調査に協力を得ることが許されなければ、時間を追って理論化を試みるTEM図による分析は成立しなかったと思われる。この研究が実践と一体化してまとめられたことは大きな成果である。本研究は調査実施保育所と保育士に対して信頼感を抱いている人に限定されている。信頼感を抱いているからこそ調査への協力が得られ、そうした事例を分析し、良き関係を分析することで、支援の方法を提言することができた。

第2に、これまで保育所は、多数の親子が利用する児童福祉施設として、仕事と子育ての両立支援施設としての役割が期待されてきた。近年はそれに加えて子育て方法を助言する子育て支援の役割も期待されるようになってきているが、現実には保育所を利用する子育て家庭は、そこで想定されてきた子育て相談や課題よりもはるかに困難な子育て課題を抱える親子であり、保育所ではそれに対する支援を求められている。これまで、保育所で言われてきた「あの先生が好き」「あの先生の支援は素晴らしい」という支援のプロセスを、そうした保育現場の実態に対応する新しい方法の提案として組み立てるために、実際に保育所で行われた保育士による10の支援事例を、TEM図という時間を追って相互関係を整理するという質的調査法の枠組みを使ってデータ化し、それをもとに保育所における有効な支援理論を導き出すことができたことは高く評価できる。

第3に、この実践の分析から、子育て課題をもつ母親が保育士の支援を受け入れるのは、母親が子ども期に体験し、深く母親の心に刷り込まれた母親の自分自身の親子関係について、その悲しみや苦しみに保育士が気づき、共感し、その結果、母親がその時の自分の母親が抱いていた気持ちを知ることができた時に、新しい自分の母親との関係ができることが示されている。言い換えれば、母親自身が子どもとしての気持ちから母親への移行ができることを明らかにすることができたことを示している。母親は保育士による教導によって変化したのではなく、母親自身が自己変化した結果として子育てをする主体へと変貌することが重要であることを示している。

保育所の保育士には、子どもを受け入れることができなかった母親が、保育士の支援によって自分の多様な側面を自覚することを通して、女性として、母親として自分らしい子育てをみつけていく過程を支えていくことが期待される。

第4に、本論文は、毎日親子が来る保育所であるがゆえにできる有効な支援方法を、これらの実践の分析から引き出すことに成功し、提案できた。保育所は「これでいいのかな？」と不安そうに保育士に語る母親に対して、「がんばっているね」「これでいいのよ」と一つ一つ受け止めて応答するということを毎日繰り返すことができる施設である。母親が母親である自分を受け入れていく経験に日々寄り添うことができることに、保育所の実践の特徴があることを明らかにすることができている。この支援方法の発見は、今後の保育所に期待される役割として大きな意味をもつ。

第5に、保育所では、多様な職種が働き、保育士も多様な立場で利用者にかかわることができる。そうした多様な立場をとりうる保育士が、妻、母親、嫁、子、そして家庭から離れて女性として多様な役割を果たす母親に対して、その役割ごとに支援者を変えながら支援を展開することができる。筆者の言葉によると一面的なかかわりではなく、母親の役割ごとへの寄り添いが必要であり、母親の役割ごとに異なる心地よい関係を、立場の異なる保育士が連携し、かつ重なり合うようにして構築することが有効であることが明らかにされている。

第6に、ここで扱われている保育所は自治体が認可した保育所である。その認可保育所に入所することにより、公的な社会福祉制度や医療、保健など多くのサービスとつながっていくことができるようになる。さまざまな制度は利用者の意思が発生しなければ、多くの場合利用には結びつかない。そうした意味で、ハードルの低い、保育所に入所するというのが、様々なサービスとつながる第一歩となるということが明らかにされたことに意味がある。

なお、審査委員会では次のような意見が出された。

第1に、TEM図による分析された10事例すべてがここに整理された理論枠組みに収まるかということについては、それぞれの事例をより多面的に分析してほしい。調査上の限界が分析結果に影響しているのであれば、そのことをこの研究の限界として踏まえてほしい。

第2に、保育所保育の中での母親への支援の理論化について、踏みこんでほしい。

第3に、地域における子育てがそれぞれの家庭だけでは解決ができない状況になっている現代にあって、支援の中心を担う保育所が様々な子育て支援機関とどのように連携をとりながら困難な子育てを支援していくのかということ、保育所の役割や様々な機関との関係の取り方などについて、さらに分析を深めてほしい。

しかし、これらの意見は、著者の今後の課題とされる事柄であり、本論文に対する評価を損なうものではないことが確認された。

【審査結果】

以上、本論文の内容と学位審査委員会における議論を要約したところであるが、審査委員会は厳正かつ公平な審査の結果、全員が一致して、小川晶氏の論文『保育所における子育て課題を持つ母親への支援の視点と方法－保育士による母親への支援プロセス分析から－』は、博士（社会福祉学）の学位を授与するに値する水準ならびに内容を持つ論文であるとの判断に達したので、ここにその旨報告する。